

心身障害児の母子関係

中村 孝(静岡県立こども病院)
大久保 俊夫(")
北野 市子(")

前回の「母子相互作用」研究、56, 57年度に実施した「母子関係検査法(小嶋1966)」について、若干の検討を加えるとともに、心身障害児をもつ母親に実施し、その心理的特性をさぐる。

(1) 使用図版の見直し

前回で使用した子図版は、原図11枚のうち比較的イメージのはっきりしていると思われるもの6枚を任意に選択したものである。しかし、一種の投影法である本法の重要な条件である多義性を考慮すると、分りやすい図版というのは、むしろ反応の画一性を生じさせる傾向がある。従って、残り5枚の子図版を使用して検査を実施し、すでに得られている6枚の図版についての結果と比較検討し、使用図版の見直しを行なう。

(2) 各図版の知覚分析

前回得られた結果のストーリー分析により、各図版に対して母親がもつイメージ(知覚)には一定の傾向があることが分っている。従ってこれらを統計的に裏づけるために、各図版に描かれた姿態に対するイメージの調査を成人に実施する。

(3) ストーリー分析法の検討

原法による分析法を再検討し、自由記述で得られた反応を構造化できるような分析的枠組みを研究する。

(4) 心身障害児をもつ母親への実施

本検査法は、先に述べた投影法の検査仮説に基づくものであると同時に、母子関係理論を基礎とするものである。母子関係は、母から子への一方的働きかけで成立するものではなく、母子の相互作用によって形作られていくものである。子どものもつ特定の容姿・身振り・動作・言語に対する母親の認知・反応の仕方には、この母子相互関係が表現されていると考えられる。

特に、心身障害児の様々な反応や行動は、その母親のこどもに対する認知や行動に影響を与えて

いることが考えられる。

従って、本検査法を心身障害児をもつ母親に実施し、健常児をもつ母親との比較を行なって、その心理的特性を把握する。

小嶋(1973)によれば、心身障害児をもつ母親を対象として本検査法を用いた臨床的研究は、これまでに、小児喘息児の母子関係(沢見)、自閉症児の母子関係(栗栖)、精神薄弱児の母子関係(市瀬)、ダウン症児の母子関係(中内)などがあり、その他に、精神薄弱児の母子関係(宮崎他1977)などがある。これらの研究では、母子間の距離や母子関係の知覚などに正常児群との差異を見出している。

我々は、これらの障害に肢体不自由児等を加え、より広い資料収集と分析を試みる。

昭和58年度研究報告

心身障害児の母子関係を明らかにするための方法として、前回の「母子相互作用」研究に引き続き、小嶋(1966)の「母子関係検査法」を用いる。今年度は、初年度であるため、基礎的研究として、「母子関係検査法」の検査結果の処理・分析方法についての再検討を行なった。

結果の処理については、従来の方法では、測定があいまいであった「母子間の距離」の測定を、簡便かつ正確に実施するため、ビニールシートを用いた、「母子間距離測定シート」を作成した。

結果の分析については、特にストーリー内容の分析方法の再検討を行なった。これは、本検査に用いられる各図版の母子像が、多義的であるにもかかわらず、ストーリー内容を分析すると、いくつかのパターンに分かれるためであり、これを考慮したストーリー分析が必要と考えられる為である。前研究で実施した分を対象とし、結果は現在検討中である。